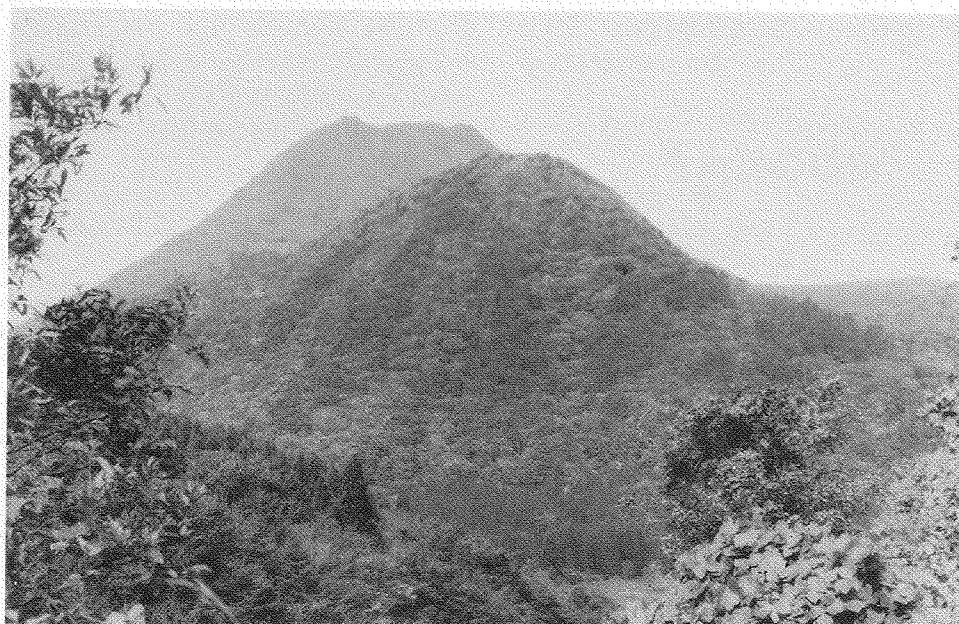


---

# べっふの文化財

No. 22  
平成3年3月

— 日向岳の自然 —



日向岳（城島高原から望む）

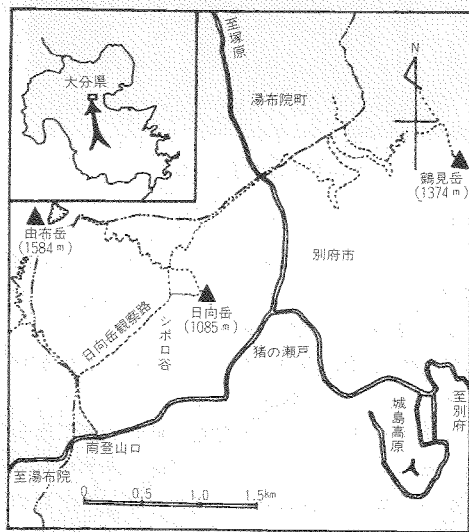
別府市教育委員会  
別府市文化財調査委員会

## 日向岳の自然

日向岳（1085m）は、「豊後富士」の名で知られる秀峰由布岳（1584m）の南東山腹にピークをもつ寄生火口丘の鐘状火山である。

由布岳、鶴見岳に代表される由布・鶴見火山群は、山陰火山系に属している。その火山活動は今から20数万年前に始まり、由布岳など主峰が形づくられた主な火山活動は、第四紀の更新世（約3万年前）であったとされている。日向岳もこの時代にできたものである。

地質的には、由布岳と同じ角閃石安山岩であるが、熱変成を受け、もろくなったものが多い。また、表層部は黒ボク火山灰土壌でおおわれているが、表土の露出した部分は豪雨になると火山灰の泥流が流れ、日向岳山腹にも数本の谷が形成されている。



位置図

気候的には、夏涼しく、梅雨から秋の台風シーズンに雨の多い九州中央高原型に近い。1972年の観測データによると、猪の瀬戸における年平均気温は10.5℃、年間降水量1875mmとなっていて、別府市街地と比べると降雪のある冬に降水量が多く年間で約100mm猪の瀬戸のほうが多い、また平均気温では5.9℃低くなっている。

別府市では、動物・植物を含むこの地域の自然について由布・鶴見火山群学術調査を実施し1974年に報告書を作成している。また、1980年に別府市環境保全条例に基づく保護地区等の候補地として日向岳一帯の自然林が調査され報告されている。

今回は、自然を尊び、自然に関心をもつ人々のために1976年に林野庁から自然休養林として指定された「日向岳観察路」を中心に日向岳一帯の植物と野鳥について述べる。

## 日向岳の植物

荒金正憲・小田 毅

標高720～1085mの日向岳山腹は、植物分布の垂直植生帯区分では低山帯に相当する。地史的に古い低山地の極盛相林（長時間をかけて最終的に形づくられる森）は、西日本ではモミ林やツガ林といった常緑針葉樹林であるが、由布岳一帯の山群は火山活動の歴史が新しく、落葉広葉樹林におおわれている。

この一帯の植物相（フロラ）の調査は、古くは江戸末期の本草学者賀来飛霞（安心院町佐田郷出身）の『油布嶽採葉記』に始まり、多くの先人が手掛けてきている。

ここでは、地域を日向岳に限定してその植生と特徴的な植物について述べる。

別府市街地と猪の瀬戸の気温と降水量

		月												年間
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
別府 1) 市街地	気温℃	6.2	6.8	9.6	14.3	18.5	21.7	26.2	27.4	24.2	18.8	14.1	9.1	16.4
	降水量mm	46	72	86	145	192	311	276	191	250	108	75	47	1777
2) 猪の瀬戸	気温℃	26	2.2	10.2	9.9	15.6	17.9	18.9	15.7	9.6	7.9	5.1	10.5	
	降水量mm	118	134	81	123	420	467	105	211	97	67	52	1875	

1) 1941～1970年の平均値（『大分県の気候誌』より） 2) 1972年の測定値（『奥別府の自然』より）

## 日向岳の植生

日向岳の植生はコナラ林、ブナ林、ミヤマキリシマ低木林、ミズキ林、アセビ林、ツクシヤブウツギ林といった自然林と、スギ・ヒノキ植栽林あるいは植栽後自然林に戻りつつあるアカマツ林に区分される。それぞれの植生は、概ね植生分布図のようになっている。

次に、これらの植生について解説する。

### 紅葉織りなすコナラ林

もみじ葉のいまだ残れる由布山の

ふもとのさとに一夜ねて見む

明治時代の作家田山花袋の詠んだ歌である。

11月のころであろうか。由布岳の紅葉は見事であり、まさに錦織なすの景である。

この紅葉を演じているのがコナラ林とクマシデ林であるが、日向岳ではクマシデが少なくコナラがこれに代って林をつくり、この一帯を代表する落葉広葉樹林となっている。

この林は、標高850～1100mの山腹に成立していて階層構造も明瞭であり、高木層の優占種はコナラで、亜高木層ではコハウチワカエデ、エゴノキ、リョウブ、低木層ではコガクウツギ、ヤマツツジがよく生育している。

林内は比較的明るくて草本層ではヤマシロギク、モミジガサ、チゴユリなどの生育がよい。

組成的には紅葉の美しいカエデ類、ヤマボウシ、ガマズミ類、ツリバナ、コマユミなどクマシデ林の種と共通していて、種数も多い。その大部分は落葉樹で、芽ぶきの新緑のころ、冬の眠りを前にした紅葉の季節には万人の心に安らぎを与えてくれる。

### 落葉樹林の極致ブナ林

猪の瀬戸～塚原道の観察路入口から600mほど歩くと谷沿いに大きく樹冠を広げたブナの林がある。

ブナ林は日本の山地を代表する落葉広葉樹林で、一般には林床にササを伴っていて山地帯の極盛相林である。全国各地に分布していて、大分県では祖母山、傾山、釈迦ヶ岳、御前岳などの標高900m以上の山地に成立しているが、由布岳一帯では観察路沿いのこの部分にしか認められない。

くじゅう山群でも黒岳を除くとブナ林は極め

て少ない。その原因はおそらく火山活動によるものと考えられる。

このブナ林は小面積で、林床のササも欠落している。しかし、なんといってもブナ林は落葉樹林の極致で、このブナも胸高直径が35～80cmあって、八方に枝を広げた樹形は風雪を耐えぬいた頑固さを感じさせる。



日向岳を代表するコナラ林

### 初夏を彩るミヤマキリシマ低木林

5月の中旬から下旬にかけて九州の火山山頂部はミヤマキリシマのピンクの花に染まる。由布岳や鶴見岳の山頂も例外ではない。

日向岳山頂は1085mで、やや高度は下がるがミヤマキリシマの群落がある。

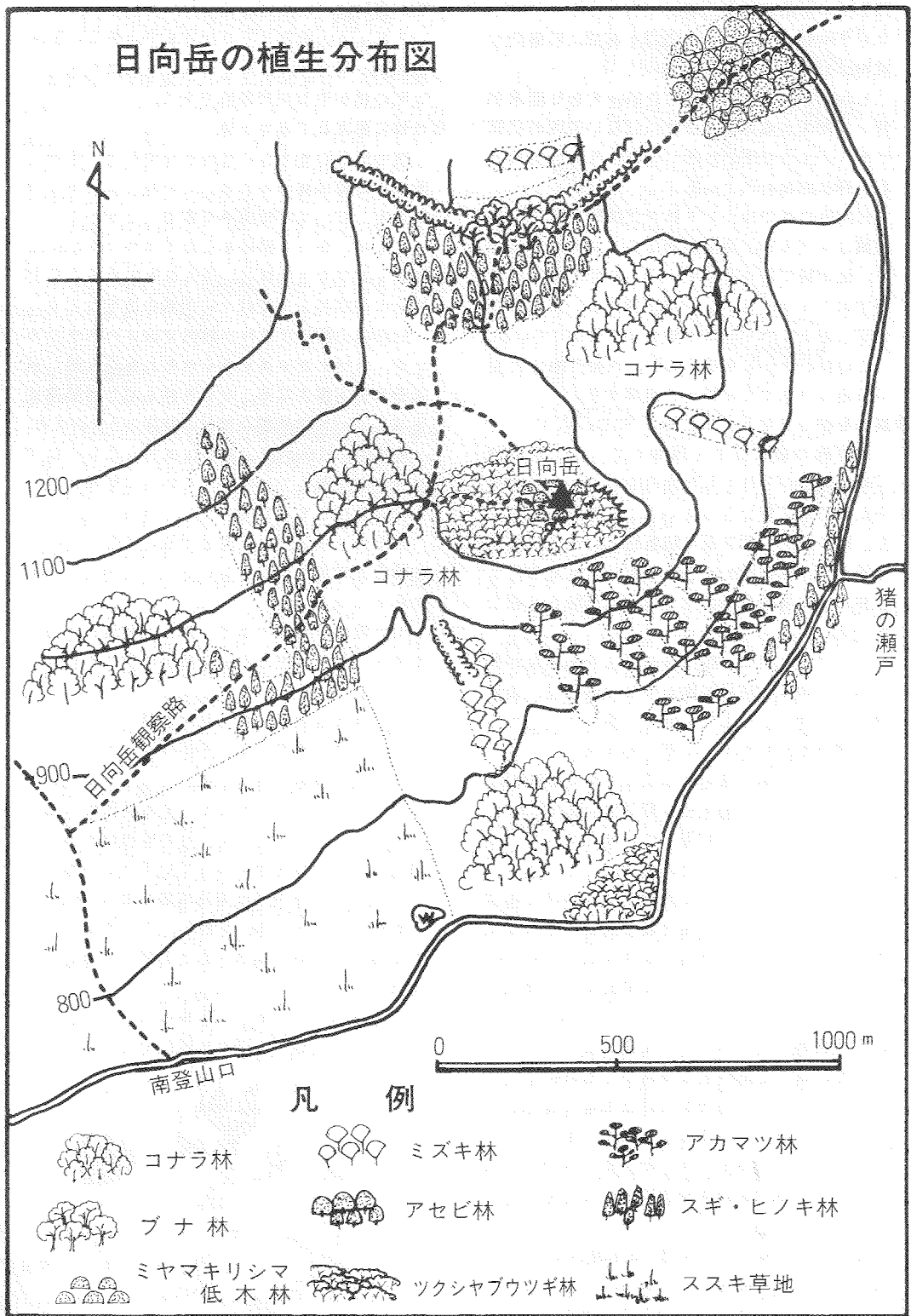
ミヤマキリシマは、もともと岩のごろごろした、風当たりの強いところでマイヅルソウやイワカガミなどと群落をつくる。くじゅう山群の典型的な群落は、地面にはうように低く広がって群落をつくっている。

環境条件が良くなると樹高も高くなって森林化へと向かう。日向岳ではマイヅルソウやイワカガミは見られず、樹高は1.5mと高くなって森林化の可能性が少なくない。

### 谷間をおおうミズキ林

火山灰地は水の浸透がよく、涵れ谷となっていることが多い。日向岳にも数条の谷があり、最も深い西側のシボロ谷も涵れ谷で豪雨の時に泥流が流れる。

# 日向岳の植生分布図



このような谷では、植物の生育にとって必要な水分の供給は比較的容易であり、ネコノメソウやチャルメルソウの仲間など谷間に特徴的な植物の生育がみられる。

しかし、地形が不安定なため、大きな樹木が育って植生が安定するまでには長い時間が必要であり、火山の歴史の新しいところでは時代の若い林におおわれている。

日向岳の谷ではミズキ林が代表的である。高木層はミズキが、亜高木層はアブキが優占種で、低木層ではウリノキ、ハナイガダが、草本層ではジュウモンジシダの生育がよい。地形の安定したところではコケ類もよく生育している。

この林がさらに安定すると、阿蘇外輪山に見られるようなケヤキ林へと推移する。

#### 神秘さを感じさせるアセビ林

鎮守様の森は昼でも薄暗くて、子どもの頃「神様はひっそりとした森の中から、人々の暮らしぶりをご覧になっている」と聞かされていた。猪の瀬戸～塚原道の観察路入口から観察路を挟んで、幅約80mほどのアセビ林がある。この林の中は夏の真昼間でも薄暗く神秘さを感じさせる。

このアセビ林は、鎮守様の森よりも林冠が低く林内が暗くて林床植物が少ない様子は、より静寂さを増し、一人でしばらく腰を下ろしていると雑念が払われていく感じがする。

アセビは土壌の浅いところに生育する植物で、この地がちょうど由布岳と鶴見岳の鞍部にあり、表土が洗い流された結果、やせ地となってアセビの林が成立したものであろう。

アカマツが、アセビの林冠をつきぬけて生育しているが、アカマツも土壌の浅いところに生育する植物であり、林内にはリュウブやネジキ、イヌツゲ、ゼンマイなどがわずかながら育成している。

#### やぶの代表格ツクシャブウツギ林

初夏の頃、道路わきのやぶで1本の幹にロート状の白やピンクの花をつけた木にであう。

この色の違いは花期によるものであるが、これがスイカズラ科のツクシャブウツギで、こんもりとした森の周辺部や道路沿いなどにやぶをつくっている。

樹冠がせいぜい6m程度で高木層が欠け、はっきりとした階層構造はみられず、ナガバモミジイテゴやクマイチゴなど刺のある植物やミツバ

アケビ、サルトリイバラ、ヤマフジなどつる植物が多い。

くじゅう山群のノリウツギもやぶをつくるが、由布岳一帯では、なんとといってもツクシャブウツギの林がやぶの代表格である。

#### やせ地に耐えるアカマツ林

猪の瀬戸の南方から日向岳を望むと、山腹に数条の縦縞模様が見える。この部分は、冬も深緑色をしていて常緑樹林であることがわかる。

ここは、かつて植林をしたアカマツ林である。植栽したアカマツ林は、手入れを止めると自然植生の復活によって徐々に消滅の道をたどる。

日向岳山腹のアカマツ林内ではコハウチワカエデ、コバノガマズミがそれぞれ亜高木層、低木層の優占種となり、コナラ林と似た階層構造を示している自然植生復活の様相がうかがえる。

由布岳、日向岳の山腹にはあちらこちらにアカマツが生育しているが、これらは植林されたものか自生していたものかはっきりしない。

アカマツはしばしば瘦せ尾根に自生しており、山腹の土地条件の良くないところに自生したものかもしれない。

やせ地に耐えるアカマツ林も土地条件が良くなると、他の植物との生存競争に勝てず衰退していく。

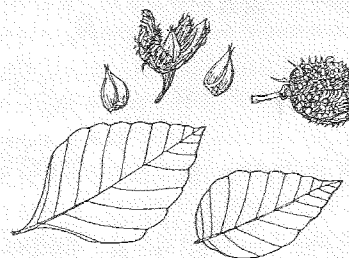
#### 人工的に育てられたスギ・ヒノキ林

道沿いや、地形のやや平坦なところにはスギやヒノキが植林されている。

これらの林は、スギやヒノキの成長だけを目的としたものであるから、他の植物は人為的に除去されて単純植生になっていることが多い。

管理された林内では亜高木層を欠き、低木層も貧弱になっている。しかし、ここでも、手入れの度合いが軽くなるともとの植生の復元が始まる。

「自然界があくまでも本来の自然を維持しようとする」人類への声なき抵抗である。



## 日向岳の特徴的な植物

由布岳の南東麓を占める日向岳は、標高720～1085m。コナラ、イヌシデ、ミズキ、ブナなどの落葉広葉樹が優勢で、秋に紅葉して落葉するものがほとんどである。一部に常緑針葉樹のアカマツや植林されたヒノキ林が見られる。林の中には、冬には地上部が枯れて、地下に芽を持つ多年草が多い。

日向岳一帯に生える植物の中から特徴的な植物をいくつかあげてみる。

〈草本の植物〉

### アオウシノケグサ (イネ科)

日向岳の山頂付近の草地や林縁に生える多年草。草丈10～20cm。密に叢生し、葉は少し白みを帯びる。6～7月、穂を出して小花をつける。穂の上部には短い毛がある。

### コバナノガリヤス (イネ科)

日当たりの良い林縁に生える多年草。九州山地(大分県、熊本県)の特産種。草丈1m内外。ノガリヤスに似ているが、花序は長く、小穂は3～4.5mmと小さくて密につく。

### タツノヒゲ (イネ科)

日向岳の山頂一帯の林内に群生する。多年草。草丈40～60cm。花は8～9月、花序は疎らな円錐状。小穂は、小枝の先に単生する。

### ツクシマムシグサ (サトイモ科)

林内に生える多年草。花は5～6月。花の仏焰苞の先は、尾状から糸状になっていて細くなる。秋には、こぶし大の穂軸面に多数の赤い果をつけて立つ。

### ミヤマナルコユリ (ユリ科)

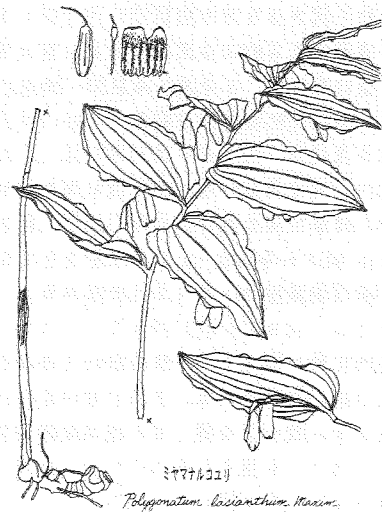
コナラ林などの林内に生える多年草。地下茎は横にはう。草丈20～30cm。6月頃、葉の裏側に花茎を出し、2～3個の白花を吊り下げる。花糸には長軟毛がある。果は藍黒色。

### シュスラン (ラン科)

林内に希に生える多年草。茎の下部は横にはい、草丈5～15cm。葉は数個、暗紫緑色でピロード状の光沢がある。8～9月、花茎の上方に淡褐色の花を4～10個つける。

### ツチアケビ (ラン科)

林内に生える腐生の寄生植物。葉緑を持たない。茎は直立し、肉質で硬い。高さ40～90cm、



上方で枝分かれます。6～7月、黄褐色の花を咲かせ、秋には肉質でアケビに似た6～8cmの紅熟した果を下垂する。

### ヒトツボクロ (ラン科)

林内に希に生える多年草。地下にある球状の偽球から1個の葉と花茎をだす。花は5～6月、淡黄緑色の小さい花を疎らにつける。

### サラシナショウマ (キンポウゲ科)

林内に生える多年草。地下茎は横に伸びる。葉は互生し、下葉は3回3出、上部のものは2回3出する。花は8～9月、1mほどの花茎の上方に柄のある小白花を穂状に密につける。

### タンナトリカブト (キンポウゲ科)

林内に生える多年草。根は肥厚する。茎は斜向し、草丈40～80cm。葉は3全裂する。花は9月頃、茎の上方に碧藍色花を咲かす。

### レイジンソウ (キンポウゲ科)

日向岳山頂近くの林内や谷間に群生する。多年草。茎は高さ40～80cm。根生葉は長い柄があって、腎円形で5～7裂する。葉は8～9月、花茎の上方に淡紫色花を数個つける。

### ヤマオダマキ (キンポウゲ科)

日当たりの良い草原に希に生える多年草。茎は高さ20～50cm。根葉は柄があって2回3出。花は6～7月、花茎の上端で下向きに数個吊り下げる。がく片は褐紫色、花弁は淡黄色。

### ヤマシャクヤク (キンポウゲ科)

やや湿った谷間に生える多年草。茎は高さ30～40cm。基部に鱗葉、中部に3個の複葉がある。

花は5月。茎頂に白花1個を咲かす。

コフウロ (フウロソウ科)

やや湿った谷間に生える多年草。茎は地をはう。葉は互生し、3全裂。高さ30~50cm。8~9月、茎の先に淡紅花を咲かす。

アケボノスマレ (スマレ科)

林内に生える多年草。葉は花に遅れて地上に伸び、成葉は深く入り込んだ心形で、長さ5~10cm、幅4~9cm。スマレの葉としては、大形。花は淡紫色で、4~5月に咲かす。

ヒゴスマレ (スマレ科)

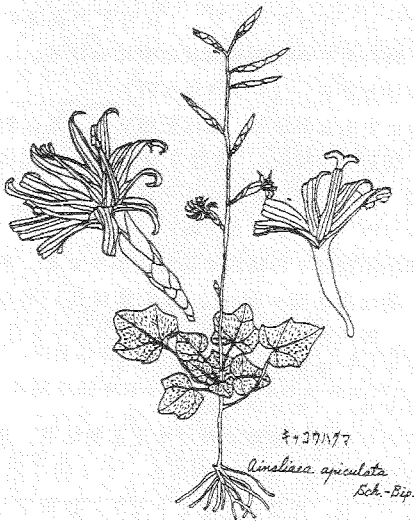
林内に希に生える多年生。葉は5全裂し、さらに、細かく分かれる。花は、4~5月に白花を咲かす。葉が3全裂して、花が淡紅紫色のエレザンスミレも見られる。

カワミドリ (シソ科)

やや明るい林内に生える多年草。全草に強い芳香がある。茎は40~60cm。葉は対生し、柄がある。8~9月、茎頂に花穂をつくり、紅紫色の小花を密生する。

キッコウハグマ (キク科)

林内に多い小形の多年草。5~8枚の葉は、茎の下に集まってロゼット状につく。9~10月、高さ10~20cmの花茎をあげて、5~10個の頭花をつける。舌状花は白色。葉がカメの甲に似ているので亀甲ハグマという。



ツクシトウヒレン (キク科)

林内に生える多年草。草丈40~80cm。茎は太く、翼があり、葉は幅が広くて厚い。9~10月、

頭花を茎の上方に数個つける。

ニシノヤマタイミンガサ (キク科)

やや湿った林内に群生する多年草。葉は大きく、径50cmほどもある。掌状に中裂する。8~9月、花茎を出して多くの頭花をつける。

ヤマシロギク (キク科)

林内に群生する多年草。茎は60~80cm。葉は茎を抱かない。8~10月、径2cm内外の頭花をつける。舌状花は白色。

〈樹木〉

ヒノキ (ヒノキ科)

植栽された高木の常緑針葉樹林。日向岳の北側及び西側(由布岳の南麓)のものは、大正の初期に植えられたもので、胸高直径が40~60cmになっている。山頂近くのものには、株元から3~4分岐したものが目につく。

アカシデ (カバノキ科)

落葉高木。樹皮は平滑で暗灰白色。葉は、ほとんど無毛となり、葉柄は紅色を帯びる。秋には鮮やかに紅葉する。他にクマンシデも見られる。

イヌシデ (カバノキ科)

林内に生える落葉高木。樹皮は平滑、往々地衣の着生で灰白色の模様ができ、老木には浅い割れ目ができる。葉には、葉柄と共に伏毛がある。コナラなどに混じって生え、林をつくる。

ミスメ 別名ヨグソミネバリ (カバノキ科)

初期の林に多い落葉高木。樹皮は暗灰色で平滑、横向き楕円形の皮目ができ、サクラの幹に似ている。樹皮は削るとサルチル酸メチルの香りがする。葉は、次年枝から2枚ずつ付く。

コナラ (ブナ科)

日当たりの良い尾根や山腹に林をつくる。落葉高木。樹皮は灰白色。縦に割れ目ができる。葉は有柄、裏面は灰白色で、星状毛と絹毛とがある。日向岳で最も優勢な樹である。

ブナ (ブナ科)

日向岳の北側の谷に林をつくる。落葉高木。胸高直径が60~80cmの大樹もある。樹皮は灰白色で平滑。しばしば地衣がついて丸い斑紋をつくる。葉の縁は、波状になっていて尖っていない。秋には、樺色に紅葉する。

カナクギノキ (クスノキ科)

山頂付近など若い林に多く見かける落葉高木。樹皮は薄い鱗片となって、はげ落ちる。4月に多数の黄色の小花を梢に輪生する。秋には多く

の赤い果をつける。

**ケクロモジ** (クスノキ科)

ミズキ林などの谷沿いの林に多く生える。落葉低木。若枝は黄緑色、2~3年枝は黒くなる。枝は芳香があって、楊子に用いられる。4月上旬、梢に小黄花を輪状に咲かせる。ほかに、葉が小さくて毛の少ないヒメクロモジもある。

**コガクウツギ** (ユキノシタ科)

コナラ林などの林内に群生する。高さ1m内外の落葉低木。多くの小枝に分かれる。6月頃、枝の先に、白色の装飾花と両性花とを咲かす。

**ヤマアジサイ** (ユキノシタ科)

やや湿った谷沿いの林内に群生する。高さ1m内外の落葉低木。葉は対生。庭に植えられているアジサイによく似ている。6~7月の頃、碧色の装飾花と目だたない両性花とを咲かす。草本で、葉が互生するクサアジサイも見られる。

**ナンキンナナカマド** (バラ科)

やや乾いた林内に生える落葉低木。葉は奇数の羽状複葉。ナナカマドに似るが、小葉の上方のものが大きい。秋に紅葉し、赤い実をつける。

**ミヤマザクラ** (バラ科)

尾根や乾いた林内に生える。落葉高木。樹皮は紫褐色、皮目は大きく横に長い。花は白色、5月下旬に葉より少し遅れて開く。葉と同時に開くヤマザクラは花色が少し紅色をおびる。日向岳にはヤマザクラが多く、春にはサクラ前線が観察される。

**シラキ** (トウダイグサ科)

日向岳一帯の林内にごく普通に見られる落葉小高木。幹は白っぽい。葉は卵形または楕円形。花は5~6月、枝の先に淡黄色の穂状花序をつける。秋には、黄色や紅色に紅葉する。

**ヤマウルシ** (ウルシ科)

一帯の林内に普通に見られる落葉の低木または小高木。葉は奇数羽状の複葉。小葉は基部のほう小さくなる。秋には紅葉する。葉や幹に触れるとかぶれることがある。つる生のツタウルシも生え、触れるとかぶれることがある。

**アオハダ** (モチノキ科)

山頂付近や乾いた林に多い落葉高木。樹皮の外皮は薄く、内皮は緑色であるのでアオハダと呼ばれる。枝の各所に短枝ができ、その先に花を集めて咲かす。果は秋に赤く熟して美しい。

**コマユミ** (ニシキギ科)

林内に普通に見られる落葉低木。茎にコルク

質の翼ができるニシキギの一品種。秋には紅葉し、果は橙赤色の仮種皮に包まれた種子が現れる。オオコマユミや別種のマユミも見られる。

**コミネカエデ** (カエデ科)

日向岳には最も普通に見られるカエデの類。落葉高木。葉は掌状に5裂、深く切れ込み、葉の先は長く尾状に尖る。秋の紅葉は美しい。日向岳には、他に、コハウチハカエデ、ウリハダカエデ、イタヤカエデ、イロハモミジ、オオモミジ、カジカエデ、チドリノキなどが見られる。

**クマヤマグミ** (グミ科)

林内に生える落葉低木。アキグミに比べると少ない。葉の質は薄く、葉の先が尾状になっている。果実は広楕円形、長さ9~12mm。秋には赤く熟れ、食べられる。

**ハリギリ** (ウコギ科)

林内によく見かける落葉高木。幹には幅の広い刺がある。葉は枝の先に集まって互生し葉身は5~9裂、イタヤカエデによく似ている。

**ハナイカダ** (ミズキ科)

やや湿った林内に生える落葉低木。高さ2m内外。若枝は無毛で緑色。花は雌雄異株、葉の中肋上の中ほどにつく。果実は黒く熟れる。

**ミズキ** (ミズキ科)

谷沿いに林をつくる落葉高木。樹皮は汚灰色。葉は互生。花は6月頃、散房状の花序をつくって白色の小花を集めて咲かす。

**ヤマボウシ** (ミズキ科)

林内に多い落葉高木。葉は対生、切れ込みはない。小花は球状に集まってつく。白色の大きな4枚の総苞片が花弁のように見える。最近、街路樹にアメリカヤマボウシが植えられている。

**リョウブ** (リョウブ科)

尾根や乾いた林に多い落葉高木。樹皮ははげ落ち、後には滑らかで茶褐色の班状の模様ができる。花は7~8月、枝の先に多数の小白花を円錐状に咲かす。

**アセビ** (ツツジ科)

尾根や岩場などに生える常緑の小高木、または低木。葉には光沢がある。早春、枝の先に多数の壺状の白花を下垂する。東登山口一帯には群生して林を作っている。花が小さくて、紅色を帯びるアケボノアセビも見られる。

**サイコクミツバツツジ** (ツツジ科)

尾根や岩場などに生える落葉低木。幹は車輪状に分かれる。葉は3輪生。花期は5月、紅葉



色花を葉より少し早く開く。

ミヤマキリシマ (ツツジ科)

日向岳の山頂付近に群生している。半常緑の低木。ヤマツツジの高山型で、枝はよく分岐し、小さい葉をつける。5月下旬、紅紫色花を咲かす。林内には、ヤマツツジも見られる。

タンナサワフタギ (ハイノキ科)

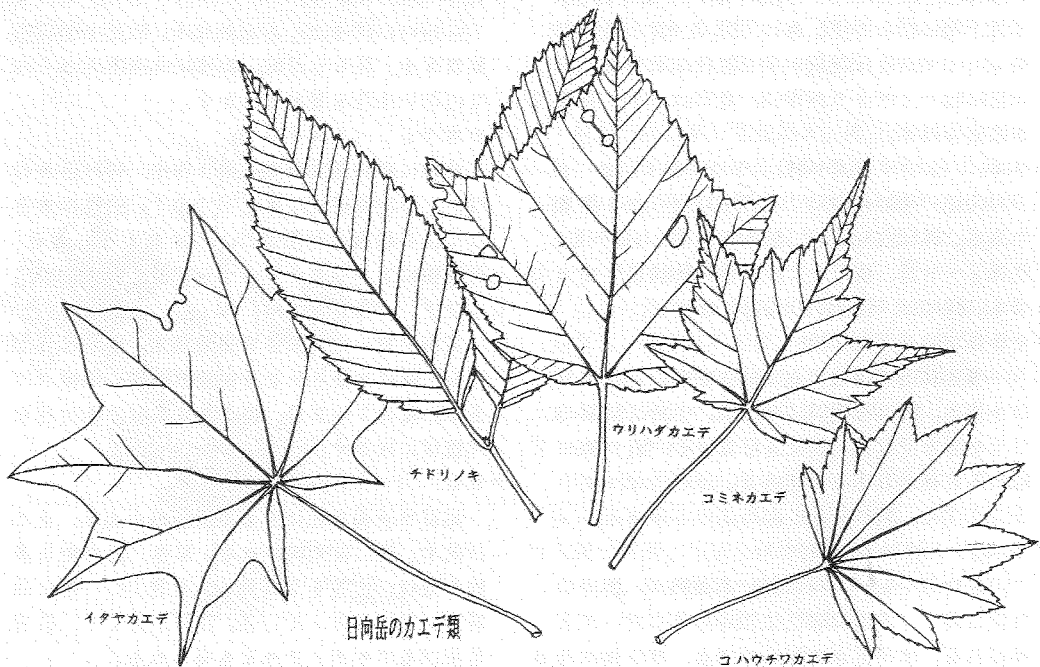
少し湿った林には多い落葉低木。葉には粗い鋸歯がある。花は6月頃、小さい白花を密につける。果実は熟すと、藍黒色になる。

ヤマトアオダモ (モクセイ科)

林内に生える落葉高木。葉は5~7小葉があり、小葉の先は尾状に長く尖る。花期は4~5月、枝の先に小さい花を密につける。

オオカメノキ (スイカズラ科)

日当たりのよい林内に生える落葉小高木。葉は対生、円心形で基部は心形になっている。花期は4月、周りに白色の無性花、中に両性花を配して咲かす。果は赤く熟れ、後に黒くなる。



## 日向岳とその周辺の野鳥

佐藤村夫

### はじめに

由布岳の南側にある山麓の草原と森林地帯、それに続く日向岳周辺は、城島高原鳥獣保護区内にある。野鳥には狩猟による生命の危険はなく、また自然も豊かで、最適の生息地である。また自然の中で安らぎをもとめる野外レクリエーションに好適な自然休養林となっている。日向岳観察路はその自然林を歩く山道である。この観察路を中心に調査をしたが、湧水地や溪流がないので、水辺の鳥はいないが、草原や森林の鳥の宝庫である。

### 野鳥の観察記録 [野鳥観察目録]

目録は、1978年から1985年までに行った19回の調査記録を中心に、2回の合同探鳥会と川瀬泰治氏の記録を加えて作成したものである。

○ 科・種名及び配列は、日本鳥類目録（1974年改訂第5版）に準拠した。

○ 記録された野鳥は21科53種にも及び、主として森林の鳥であるが、他に草原の鳥が数種と水辺の鳥がそれぞれ1種である。

○ 生活型で見ると一年中生息し繁殖もしているものが過半数の63%で、夏期に渡来し繁殖するものが26.4%、冬越しに冬期に渡来するものが7.6%、通過の途中に立寄るものが3.7%である。

### 季節と野鳥

#### 早春から初夏にかけて

野鳥はペアを組み子育てに多忙な時である。ホオジロやホオアカは草原で、セッカは低空で、ヒバリは天空や岩角でさえずりながら縄ばりを守り、餌をさがして、雛は日ごとに成長する。ハンボツガラス、トビ、イワツバメは上空で餌をさがして子育てをしている。森林に入ると身近かにシジュウカラ、ヒガラ、ヤマガラ、ゴジョウカラなどの可憐な姿と軽快なさえずりが聞かれ、時に綺麗なオオルリの姿や声に出会う。またセンダイムシクイの鳴き声の最後のジーが、長く森にひびきわた

る。その他にも、か細いヤブサメやコゲラの鳴き声、反対にどこまでも通る甲高いコジュケイ、キジの鳴き声、また静かに幹をたたくアオゲラ、オオアカゲラ、コゲラのドラミング、その合間に聞こえるウグイス、クロツグミ、キビタキなどの名調子なさえずり、うなるようなアオバトの声など40種近い鳥たちの繁殖期のコーラスで森林は、にぎやかで活気に満ちあふれている。こんな時季がすぎて、カッコウ、ツツドリ、ホトトギス、ジュイチなどの個性的な鳴き声を聞くようになると夏の訪れを感じる。

この時季は探鳥の楽しさを満喫できるよい季節である。

#### 10月から11月にかけて

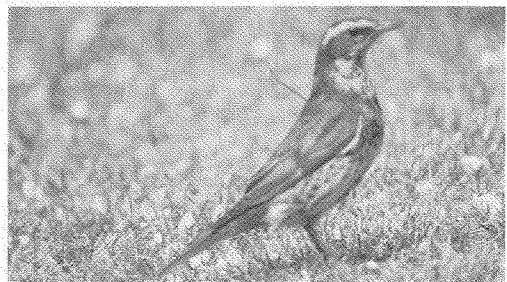
この頃はヒヨドリの大群が南へ渡る時季で、これを襲うハヤブサ、オオタカの姿を見かける。またサンバの群が内陸部の峯伝いに、上空を南下する渡りの季節である。他の野鳥たちは子別れもすぎ、一人前に成長した若鳥が群を作って行動する季節でもある。

#### 12月をすぎる冬季

ウソ、シメ、ツグミなどの冬鳥が冬越しに渡来する。野山に昆虫類が少なくなるこの時季には、野鳥の一部は、餌の多い、生息しやすい人里に移動し、野鳥は少なくなり、森は静まりかえってしまう。残った鳥たちは厳しい環境の中で生き抜いていく。

### 探鳥の楽しみ

ここでは人里に多いドバトやスズメはほとんど見られない。水辺の鳥のキセキレイも珍鳥だ。環境が変われば野鳥も違うことを肌で感じる。また森林で上空が見えにくいいため、上空を飛ぶノスリ、サンバ、トビ、ツバメは観察しにくいので、鳴き声で聞き分けるしか方法がない。それで草原や日



冬越しをするツグミ

# 野鳥観察目録

(1985年)

科名	種名 No.	観察時季					生活型	観察頻度	備考
		1	4	7	10	12			
ワシ	1 トビ		---				留	稀	
	2 ノスリ			-			留	極	1982.7.9 (1羽)
タカ	3 サシバ				--		夏	極	1979.8.30 (1) 1979.10.8 (1)
	4 ハヤブサ				-		旅	極	1985.10.7 (1)
キジ	5 コジュケイ	████████████████████					留	普	
	6 ヤマドリ				-	-	留	極	
	7 キジ	████████████████████					留	普	
ハト	8 キジバト	████████████████████					留	普	
	9 アオバト		----				留	稀	1983.5.15 (1)
ホトトギス	10 ジュウイチ			-			夏	極	1979.5.28 (1)
	11 カッコウ		---				夏	普	
	12 ツツドリ		---				夏	普	
	13 ホホトギス		---				夏	普	
キツツキ	14 アオゲラ		---				留	稀	
	15 オオアカゲラ		-----				留	稀	
	16 コゲラ	████████████████████					留	普	
ヒバリ	17 ヒバリ	████████████████████					留	普	ススキ草原に多い
ツバメ	18 ツバメ		---				夏	稀	
	19 イワツバメ		-				留	極	1979.4.17 (3)
セキレイ	20 キセキレイ		-				留	極	1979.4.17 (1)
サンショウクイ	21 サンショウクイ		---				夏	普	1979.5.11 (2)
ヒヨドリ	22 ヒヨドリ	████████████████████					留	普	
モズ	23 モズ	████████████████████					留	普	
ミソサザイ	24 ミソサザイ	████████████████████					留	稀	
ヒタキ ツグミ亜科	25 トラツグミ		-				留	極	1983.4.18 (1)
	26 クロツグミ		---				夏	普	

観察時季号

記録によって観察した時季と羽数の大略を示す。  
 — 個体数が少なく観察の機会も少ないもの。  
 ■ 容易に観察できるもので、線の太いものは羽数も多い。

生活型の号

留 留鳥で一年中見られるもの。  
 夏 夏鳥で夏期に見られる渡り鳥。  
 冬 冬鳥で冬越しにくる渡り鳥。  
 旅 旅鳥で通過の時に見られる渡り鳥。

科名	種名 No.	観 察 時 季					生活型	観察頻度	備 考
		1	4	7	10	12			
ヒタキ	27	アカハラ		-			冬	極	1978.5.11 (1)
ツグミ亜科	28	ツグミ	————				冬	普	
	29	ヤブサメ		- - - -			夏	普	
ウグイス亜科	30	ウグイス	————				留	普	
	31	メボソムシクイ		-			夏	極	1978.5.11 (1)
	32	センダイムシクイ		——			夏	普	
	33	セツカ		————			留	普	ススキ草原に多い
	34	キビタキ		————			夏	普	
	35	オオルリ		————			夏	普	
ヒタキ亜科	36	エゾヒタキ			-		旅	極	1980.9.8 (1)
	37	コサメヒタキ			-		夏	極	1981.8.19 (1)
エナガ	38	エナガ	————				留	普	
	39	コガラ		——	- - - -		留	稀	
シジュウカラ	40	ヒガラ		——	——		留	稀	
	41	ヤマガラ	————				留	普	
	42	シジュウカラ	————				留	普	
ゴジュウカラ	43	ゴジュウカラ		——			留	普	
メジロ	44	メジロ	————				留	普	
ホオジロ	45	ホオジロ	————				留	普	
	46	ホオアカ		——			留	普	
	47	ウソ		-		-	冬	稀	1978.12.3 (1) 1977.4.19 (1)
アトリ	48	イカル	————				留	普	
	49	シメ				-	冬	極	1978.12.3 (1)
ハタオリドリ	50	スズメ				-	留	極	1979.10.8 (2)
	51	カケス	————				留	普	
カラス	52	ハシボトガラス	————				留	普	
	53	ハシブトガラス		-			留	稀	1983.4.18 (1)
計	21科	53種	20種	43種	37種	23種			

観察頻度  
の記号

普 羽数に関係なくその時季によく見られるもの。  
稀 時々観察されるもの。  
極 羽数も少く観察の機会も少ないもの。

備考欄

「稀」「極」のもので、観察年月日と羽数を  
( )内に示している。

日向岳山頂部のように眺望のきく場所は、この種の鳥の貴重な観察場所となる。カラ類のシジュウカラ、ヒガラ、ヤマガラなどは羽数も多く、いつでも観察でき、巣箱での子育てまで調査できる。その他森林の鳥が多いので、時には腰を下ろして休息し、時間もかけて動かずにジッと鳴き声で調査し鳥が接近するのを待つのも効果的な調査法である。ホトトギス類のカッコウ、ツツドリ、ホトトギスは多いがジュウイチは少ないので出会うと嬉しくなる。ミソサザイ、サンショウクイ、オオルリ、ゴジュウカラなどに稀に出会うと緊張するし、トラツグミ、アカハラ、メボソムシクイ、エゾビタキなど更に珍鳥に出会うと全く興奮してしまい夢中になってしまう。落葉しつくした静寂な冬の森で、ウソ、シメの姿や声に緊張するのも楽しい。また、ハンプトガラスは大変少ないので、カラスは特に注意して見分けねばならない。野鳥の観察には多くの種類に巡り会える子育ての頃が一番面白い。さえざりは聞かれるし、美しく活動的な姿を見る機会は多いし、種類分けも正確にでき効果的な調査ができる。しかし四季を通じて根気強く、ペアづくり、子育て、子別れ、集団づくりの実態のすべてに接するように努力することが、野鳥を生物としてとらえ、認識をより一層深めていくことになる。ここは市街地から近距離にある、野鳥との出会いを楽しめるよい場所である。

## 日向岳の探勝

由布・鶴見自然休養林（870ha）は、1976年（昭和51年）2月に、林野庁の指定を受け、登山道、自然観察路、展望所、園地などの諸計画が整備されていった。その時に、由布岳の南登山道と日向岳、そして東登山道とを結ぶ「日向岳観察路」が設けられた。この観察路は、由布岳の南山麓の自然林をくぐる1800mのコースで、豊かな落葉広葉樹林帯の自然を満喫できる。標高差は、約260m。ほとんど、なだらかな登山路で、南登山口から日向岳までゆっくり時間をとって2時間、東登山口から1時間30分。全コースでは3時間を見ておくとよい。観察の内容によってはさらに時間の余裕をとっておくとよいだろう。子供連れ、家族連れで楽しめるコースでもある。それぞれの登山口には、トイレの設備も備わっている。

### 《日向岳の四季》

3月下旬頃から春は動き始める。寒風にアセビの白花、ケクロモジ、カナクキノキの黄花が春を告げる。ヤマザクラ前線が通るのは4月下旬から5月上旬。一気に樹々とりどりの新葉が吹き出て春を装い、日向岳の山頂には、ミヤマキリシマの紅紫色花が咲く。6月中旬を過ぎる頃には、樹々の葉は開ききって緑を増していく。ミズキの白花が散ると、林内には、コガクウツギの白花、ヤマアジサイの藍紫花と次々と咲かせていって、長い夏の季節に移り変わっていく。8月下旬から秋は漂い始める。9月には、タンナトリカブト、サラシナショウマ、ヤマシロギクと林の中の草々の花が咲きついでいって、10月中旬には、コナラのどんぐりが地に転がり、樹々の紅葉が始まる。紅葉の盛りは10月下旬、モミジ前線は由布岳山頂から日向岳へ、そして山裾へと通り過ぎ、すべての落ち葉が散り敷くと梢が明るい冬の林となる。そして、樹々は、きびしい冬の風雪に耐えて春を待つ。

- 謙虚に自然から学び、自然に感謝しよう。
- 一木一草を大切に、自然を損なわぬようにしよう。
- この良き自然をいついつまでも子孫に継いでいこう。

### あ と が き

今回は、豊かな自然をもつ日向岳（由布岳の南東山腹）に限定して、その植生と特徴的な植物・野鳥について収録しました。

（文責 荒金正憲・小田 毅・佐藤村夫）